

地獄絵

大牟田市 江頭 民江

「ピカッ」と、写真撮影時のマグネシウムをたぐときのような、異様な光が目に入った途端、私は、何事だろうと、急いで家から眼下に広がる長崎港を見下ろしました。警報解除になったので、家の裏にあった防空壕から出て、お昼の食事の準備にふる場のドアの所にいた時でした。

昭和20年8月9日午前11時2分長崎に原爆が落されたのです。

港の中には大小の軍艦が散らばって、甲板の上で白いシャツ着た兵隊さんたちが、一瞬にして異常な状態になり、ほとんど倒れ、助けを求めている姿が目に見え込んできました。

私と一緒に防空壕を出て、隣に帰ったおばさんが「助けてー」と、家の玄関へ駆け込んで来ます。

見ると、頭、顔面、肩と、血だるまのようです。驚いて救急袋からピンセットを出して、頭に針山のように刺さったガラスを一本一本抜きました。抜いた跡から血がどンドン吹き出します。

圧迫包帯をしていると、次々にほかの隣組の人たちも、ガラス戸の近くにいた人たちが来て、また、それを抜くのにだいぶ時間がかかりました。買い出しに来ていたおばさん達が「子供たちはどうしているだろう」と、半狂乱になって名前を呼んでいます。

夜になって、港の向い側から火の手が上がりました。火事です。三晩ほど燃え続け、長崎市内ほとんどが灰になりました。

アメリカ軍が上陸して来るので、女たちは避難するようにと隣組からの報道があり、救急袋と防空ずきんをかぶり、山手の方へと逃げました。途中、浦上川の河口には木のくいに女の人の長い髪が巻き付いて、流れ口をふさいでいます。上流から次々と死体が流れて、河口を埋め尽くしています。電車の中にも、満員だったらしく、前から後まで、つり皮に下がった状態で骨が折り重なっています。大人の骨の背中に、小さな子供の骨がおんぶされたままです。運転席も骨で、燃え方のすざましさが想像されます。途中、馬車を引いていた人も骨だけです。

馬は立ったまま、おしりから煙を出してくすぶっているのです。私たちは、もう夢中で、浦上駅の中へ入りました。ここも死体の山です。

まだ息のある人が、「ウンウン」とうめきながら、小さい声で「水を水を」と哀願するように手を合わされ『ガクン』と息絶えていかれます。「助けて、助けて」と全身の熱傷に痛みをこらえながら、わが子の名を呼ぶお母さんの姿、本当に地獄です。

「ぐずぐずしていたら置いて行かれるよ」との、おばさんの声に「はっ」と我にかえり、走り出しました。道の尾の駅も、死体と負傷者でいっぱいです。真夏のこととてハエが群がっています。

二晩は近所の知人の農家にお世話になりましたが、5人もの人数で、いつまでもご迷惑はかけられないと、三日目に長崎に帰りました。

その時は、一面、焼け野原になったところで、肉親の遺体を付近の焼け残った木を集めて茶

毘（だび）に付す姿が、あちらこちらに見受けられ、自宅の跡に横たわっている人の骨を拾い、丁寧に袋に入れ、「お母さん、お母さん」と肩を寄せ合って泣き崩れている家族の姿に、そっと合掌をして通りました。

飼い主を亡くしたニワトリが、あちらこちらにさまよっている光景も哀れでした。

大牟田に嫁に行くことが決まり、当時は病院を退職して1週間目。食糧はないし、大牟田の婚家は農家で、叔母の家でもあったので、大牟田に行く決心をしました。

汽車も貨物列車で窓もなく、人間はいっぱい詰め込まれ、汽車が停車すると将棋倒しになり、汗は流れ、ときに途中で急に止まり、屋根に登る人もいて、なのになんか、いきなり汽車が走り出す始末です。

長い時間をかけて大牟田駅に着きました。ここも、空襲で市役所とそのほかのビルが少し残っているだけで、焼け野原です。一人でしたので、心細いやら、不安で一杯でした。

やがて今の婚家に着きました。主人はまだ復員していませんし、農作業はしたことはありません。慣れない仕事に、押しかけて来たようで悲しい想いをしました。

翌々年、主人が復員し、女の子ばかり次々と4人、生まれましたが、田舎のこととて、「長崎で原爆で遭った者の子供を嫁にもらうと、真っ黒い赤ん坊が生まれるそうなの」という根拠のないうわさが飛び交っていたため、ひたすら原爆に遭ったことを隠し通しました。

長崎の伯父が被爆者手帳を申請するように、再三勧めてくれましたが、娘達が結婚できなかったらいけないと思い、申請しませんでした。

戦後29年を経て皆さんが、証人探しをしてでも被爆者手帳申請されると聞き、やっとその気になり、昭和49年に、長崎のいところに頼んで証人探しをしてもらいました。

当時の近所の人たちも、年老いて親類の家に行かれたり、亡くなられたり、なかなか分からなかったのですが、意外にも被爆時に、一番先にガラスの破片を抜いて手当てをした、隣のおばさんが、時津の息子さんの所におられると聞いて、やっと探し当てました。そこで、いとお嫁さんが会ったところ、被爆当時の事を覚えてくださっていて「あのとき大変お世話になった」と感謝してくださり、もう90歳近くになられていた由ですが、心よく証明してくださって、やっと被爆手帳を頂くことができました。

大牟田に来てからは、長崎で被爆した時に右足に負った傷が、長い間、治らなくて困った。病院にあらためて就職(38歳時)してから、白血球が異常に減少して、レントゲン線室へは入らない方がいいと、医師から言われた。いつも死の灰の恐怖におびえていました。

現在、あの当時の恐ろしさ、物資不足、食糧難のことを思うとき、絶対、戦争はしてはいけません。今になってアメリカは、「原爆は必要だった」と言っているようですが、被爆国日本は、この先も非核を守り、原爆の悲惨さを語り伝えていかなければならないと思います。

いつまでも平和でありますよう祈らずにはられません。

当時のことは思い出したくないと心の奥に隠していましたが、戦争の体験を伝える人たちも高齢化して、次第に少なくなりつつある現在、あの被爆当時の事実を、後世に伝える義務があると思い、ここに書き記しました。